

余野川ダムはいらない



ムダな余野川ダム事業の中止を

総合治水で災害のないまちづくり

緑と環境をまもる

図 説

ダムに頼らない総合治水

一庫ダムの洪水調節で川はどうなるの

ダム操作変更で、ダム災害の危険も

《平成12年6月の変更説明》

中小洪水を目標とした洪水調節であるため、100年に一回程度の確率で発生する洪水に対してはダムの洪水調節量が満杯となり、ダムの放流量は一時的にこれまでよりも多くの水を放流することになります。

ダム操作の新と旧の比較

	旧	新
洪水調節確率	1/100	1/20
ダムの貯留	1320 ㍓	790 ㍓
ダムの放流	650 ㍓	150 ㍓

20年確率を上回る降雨が発生すると、ダム75m高さから流れ落ち強い力のダム洪水が心配です。凶作部上流の災害低減対策に役立つどころか、逆に大災害の要因となる、安全・治水思想が変。猪名川中・下流を浅深・掘り下げ洪水流下能力を高め狭窄部を順次、取り除き、地域治水への転換により多田地区と下流の災害低減をはかることです。

急げ！多田の災害対策 狭さく部を拡げる

中小流対策と総合治水に合わせ段階的に



『余野川ダム計画の見直し(案)説明』

- ① 狭さく部上流の浸水被害に対しては、下流堤防の破堤の危険性を増大させる狭さく部の開削は当面できない。
 - ② 余野川ダムは、下流部の浸水被害を軽減する効果がある。
- *であるから、ダムは必要?? ……。

- ① しゅんせつ、河底掘り下げ、堰の撤去検討、低水路の拡幅検討などにより、中下流の流下能力と、河道内貯留効果を改革。
- ② 上流域のこれ以上の市街化を見直し、既設の防災池などの拡充と地域対策(総合治水)
- ③ 百年確率の大雨には、ダム災害を容認する中小洪水対策の一庫ダム操作を再検討する。
- ④ 「堤防破堤の危険」区間を公開し、下流の耐震補強とともに、堤防補強の推進。

河川整備とダム(箕面ダム・一庫ダム)効果で 一部を除き、計画高水は十分に流せる猪名川

急がれ！る狭い一部の整備と堤防補強

現況の河道容量と計画高水

(単位: m³/秒)

	戸の内	名神高速	阪急鉄橋	小戸	銀橋上流	多田大橋
河道容量	3800	3200	3600	3700	1000	3100
計画高水	2800			2300		
基本高水	4000			3500		

*説明資料「第4節 越水破堤、洗掘、浸透により破堤が生じる可能性がある区間」の河道容量を参考とした。

*最小の河道容量は、小戸と銀橋の間(距離標 12.4km)の 1000m³である。

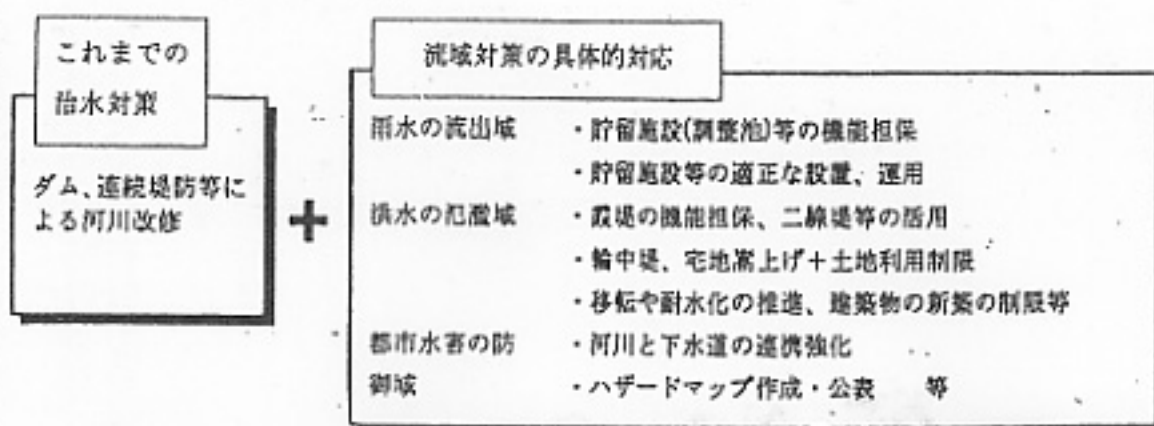
*この河道容量は、堤防いっぱいには洪水が流れても堤防は破堤しと推定したもの

*安全に流下できる流量を表していない。必要な補強区間の補強すること。

⑪

余野川ダム計画の問題点を 市民本位に解決するために

「ダムは要らない」のではなく、・・・



ダム建設は最後の手段にすべき、理由はあまりにもデメリットの多い治水手段であるからです。一庫ダム上流域や、猪名川上流域にも、地域に総合的な治水対策を行えば、狭窄部上流への洪水負担は軽減されます。更に、箕面川や千里川、最明寺川?なども総合的な治水対策を行えば猪名川の治水水準は向上する。

図表—4 ダム建設による変化
その1. 河川の流れと河床の変化

	【河川のすがた】	【ダムがある場合】
① 河床 の 変 化	<ul style="list-style-type: none"> ・ 流れる土砂量は、バランスとれ基本的には、河床の急激な変化はない ・ 河道には、淵や瀬ができ、海岸に土砂を供給し海浜を養う 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ダム湖に上流からの土砂の流れが止められ、堆砂が進行、流れ込む有機物の木々等の腐敗が進み、ヘドロが沈み堆積する ・ 下流は河底が低下し河川工作物が破壊される、上流では背砂で河床上昇による水害拡大 ・ 海岸の砂浜が後退しなくなる
② 河 川 の 流 れ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 洪水から濁水まで季節に応じた変化があり、大雨の状況から出水の時間とその程度をある程度予想 ・ 年数回程度の中小洪水流は河床の土砂レキや沈殿物を洗い流し、河道を浄化する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ダム湖は洪水がなくても水位変動が大きく、洪水の伝わり広がる事は早くなる ・ 利水ダムの場合には平常の流量が極度に低下し、中小洪水はほとんどなくなる

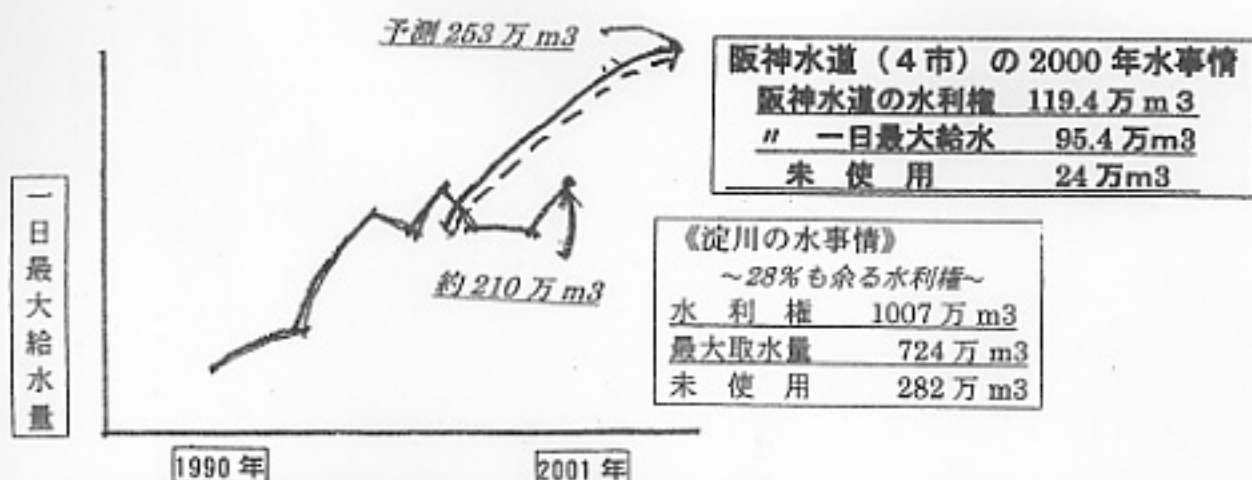
その2. 環境（生態系、水質など）

	【河川のすがた】	【ダムがある場合】
① 生 態 系	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中小洪水により埋まっていた泥が洗い流され、小動物の棲息条件ができる ・ 淵や瀬は魚などの棲息・生態系に役立ち、生物は川に沿って移動する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 広い森林などの水没で小動物の棲息条件が奪われ、川に沿って移動する行路がダムにより断たれる、ダム湖に赤潮が発生する ・ 中小洪水の減少で淵や瀬がなくなり、ドロやヘドロが付着し、生物の棲息条件が奪われる
② 水 質 等	<ul style="list-style-type: none"> ・ 砂礫によるろ過や大気による爆気、小動物による水質浄化で清流 ・ 河川その周辺からの蒸発により、水温、気温、湿度が適度に保たれる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 湖底のヘドロが流出、下流河道に沈み積もり水質が悪化する ・ 放流水の水温が低下したり、河底が干上がったたり、水温や湿度、湿度が異常になる



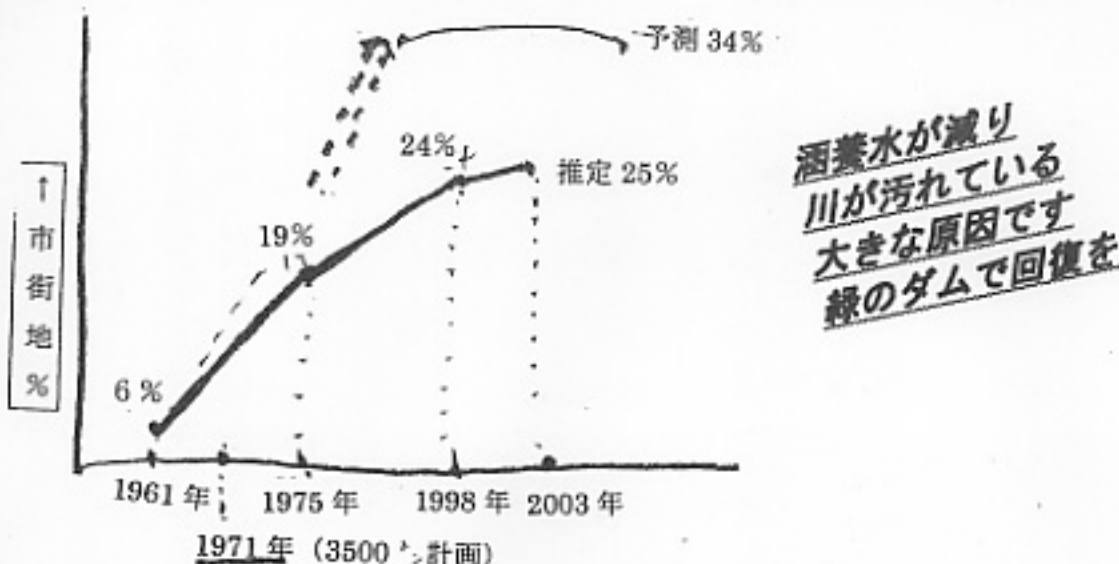
実際には水需要がない 工業用水も余ってる
阪神水道も府営水道も、水余る淀川水利で充分
余野川ダム9万トンは要りません

府営水道の需要予測と実績



水資源（上水道）を淀川で日量1007万m³を確保、最大取水724万m³、約280万m³余り、工業用水も約10万m³余っています。府水道の実績（約210万m³）は、需要予測253万を大きく下回り、阪神水道も24万m³余っています。ところが水道料金の値上げにつながる余野川ダムの水利確保に固執していますが、調査・検討が求められます。

巨大開発、猪名川流域の市街化率34%が
基本高水3500トンの余野川ダム治水問題の原因



- ・計画高水（三〇〇トン）は過大で再検討するとともに、流域遊水のある程度容認し、地域治水を推進すれば、ダムはいりません。

- ・ダムの分派堰から合流点（三・七キロメートル）間の護岸整備で堤防を農道にする計画を見直します。

- ・五十ミリ対策済みの約一・六キロメートルに道路拡幅と河川環境計画の見直し、国道危険ヶ所を改良します。

▽川西池田特殊堤防区間の計画高水二三〇〇トンを再検討し、安全に流下させる対策をすすめます。

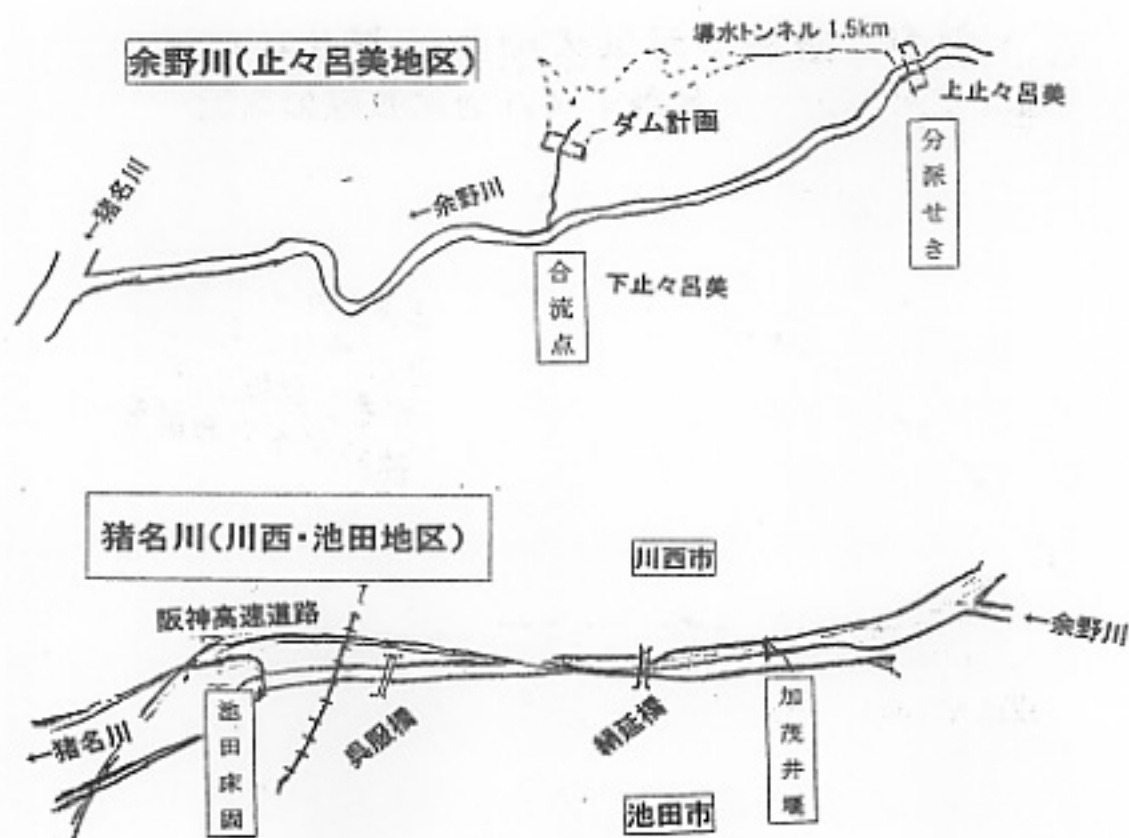
- ・網延橋狭窄部などの早期整備、池田床止から加茂井堰までの低水護岸補強と河床の掘下げ、低水路部の拡幅を検討します。
- ・河川沿岸の道路と河道の再調整で河積拡幅、定期的な浚渫などを具体的に市民とともに調査検討します。

▽内水対策は従来型の排水対策に加えて、一時貯めて資源として利用する。節水型の地域社会を推進します。

- ・都市の浸水対策は、排水路と排水設備を再検討しポンプ増設等により浸水被害を軽減します。

- ・校庭貯留や各戸雨水一時貯留浸透、棟間貯留を地域から国庫補助事業のミニ総合治水（一時貯める・流す・抑制する）を無数に設置します。

- ・流せば水害、貯めれば資源という雨水利用を促進します。（学校など公共施設等）



堤防の補強と河川改修に加えて、流域全ての地域から校庭貯留や各戸貯留など調節池（貯留施設）の適正な設置・運用、洪水の氾濫地域対策、都市低地での浸水への内水対策の強化、貯水・水資源涵養、土砂災害防止などの機能を高める山林対策の推進というダムに頼らない地域対策を講じることです。これらの事業は雇用効果も大きく、地元建設業向けであり、景気対策にも期待でき、環境と緑をまもる二十一世紀のふさわしい総合政策です。

②当面する具体的な提案

急げ、多田地域の水害対策・狭窄部を開削するため、上流と下流の地域対策に合わせて段階的に開削を

▽国は、「余野川ダムは、下流部の浸水被害を軽減する効果がある」「狭窄部上流の浸水被害に対しては、下流堤防の破堤の危険性から狭窄部の開削は当面できない」と、猪名川整備期間の二十年から三十年間は、狭窄部開削ができないとしているようですが、次の五点は検討すべきです。

- ・狭窄部開削にむけて急ぎ調査検討します。
- ・浚渫と河床掘下げ、堰の撤去、低水路の拡大などにより、中下流の河川能力と河道貯留効果を改革します。
- ・上流域でこれ以上の市街化を見直し、既設の防災池などの拡充と地域から治水（砂防）治水を促進します。
- ・百年確立の大雨にはダム災害を容認する一庫ダム操作を検討します。
- ・「堤防の破堤危険」区間を公開し、下流の震災補強と合わせて堤防補強を推進します。

ダムによるデメリット

一九九四年、アメリカでは開墾局の [] が「ダムは環境を崩す」と明言し、不必要なダムを壊して自然に戻しています。ヨーロッパでは川とダムによる治水問題の解決のために、ダムに頼らない地域治水への政策転換の二十一世紀に入っています。

ダムは、ダム湖と下流の濁水、赤潮、有機物によるヘドロ等の水質問題やダムと分派堰により川の土砂移動の連続性が遮断され、洗掘され河床が低下し、橋や護岸で取水に影響が起りやすくなります。動植物は、ダム湖に沈み死滅したり、分断され孤立化し、移動阻止などダムや堰の下流では水質・推量の変化で生息・生育環境が悪化します。さらに、計画を超える洪水やダム湖岸の地滑りによるダム津波やダムからの越流など、ダム建設によって水害が激化したり、発生する場合があります。

▽止々呂美の豊かな自然の余野川を守り、五十ミリ対策の早期完成、局部改良と地域治水（総合的な治水）を行うこと。次の四点を再検討します。

- ・ムダな余野川ダムのため、五十ミリ対策済みの区間に再び堤防拡幅と取水工事は、自然と環境破壊をもたらすので中止します。

くなり、また、河川構造例より五百トン過大に算出されている基本高水の見直しで治水としての余野川ダムの必要性はありません。

そもそも国は、猪名川河川行政で「総合治水パイロット事業」のもと三十数年間に市街地率を二十五%に高め、災害危険エネルギーを拡大させています。それに一庫ダムと川の改修で計画流量を流す防災治水をすすめる一方で、川の中に洪水の流れを大きく阻害する阪神高速ブリッジの大橋脚を認めるチグハグさです。

水害常習の多田地区と川西・池田の未改修問題は、乱開発型の総合治水を約二十年間続け政策的に災害危険性を蓄積させてきたこと、と真の総合治水対策と下流部における低水路拡幅・浚渫（しゅんせつ）などの河川対策の遅れが問題でした。

二、ムダなダム中止と 防災治水の前進のために

①猪名川・余野川の総合的な防災対策

流域住民が懸念している猪名川の合理的な災害対策のためには、余野川ダムへの固執は止めて、環境破壊の乱開発と水害対策の遅れ、過大な水利確保など国土政策の誤りを反省し、その教訓を生かすことが問われています。

国の新しい「流域対策」を猪名川や余野川の地域治水に生かすことが必要です。猪名川の洪水を発生させる降雨に対し、ダム建設よりも洪水被害を分散させる流域対策（総合治水）が、基本的な解決の方向です。「特定都市河川浸水被害対策法」を適用します。

●国土交通省による余野川ダム計画の見直し案について

猪名川狭窄部上流に対する「氾濫シュミレーション」において昭和35年8月洪水（「狭窄部上流に集中した豪雨」）を対象洪水とし、下流部の「浸水被害の軽減」に対しては昭和28年9月洪水を対象洪水（「流域に均等に降った降雨」）としている問題点。

実績降雨の日雨量の確率評価結果（H13.10.9「H13.5.23 第一回猪名川部会における池田委員質問への回答」）

地点名	各洪水の確率評価			
	S28.9	S35.8	S42.7	S58.9
小戸	1/7	1/4054	1/18	1/5
戸の内	1/7	1/1847	1/31	1/5
神塔橋	1/6	1/355	1/46	1/7
加島	1/5	1/12	1/61	1/17

●高すぎる基本高水流量と計画高水流量

小戸地点で、日雨量374.6mm（1/4054年確立）という猛烈な降雨であったと思われる昭和35年8月洪水時ですら、小戸地点での猪名川の流量は1660m³/sです。同じく、昭和28年9月洪水では、日雨量148.3（1/7年確立）、流量は1090m³/sです。小戸地点で、ダムによって流量調節した後も2300m³/sという基本高水流量はあまりにも高すぎます。

ムダな余野川ダム事業の中止を

総合治水で災害のないまちづくり

緑と環境をまもる

はじめに

国土交通省の諮問機関「琵琶湖・淀川水系流域委員会」は、「ダムは自然環境に及ぼす影響が大きいことなどのため、原則として建設しないものとし、考えうるすべての実行可能で有効な方法がないということが客観的にみとめられ、かつ住民団体の社会的合意が得られたものにかぎり建設をするものとする」という提言をおこない、余野川ダムは建設の必要性はないと発表しました。

これはダムに頼らずに治水・利水対策を施し、ムダな開発経費を削り、自然環境を守る多くの国民の願いにかなったものでした。にもかかわらず国土交通省近畿整備局は余野川ダムの利水と治水を変更する一方、治水の代替案を検討し利水の見直しを先送りして余野川ダムの建設に固執しています。その姿勢は住民の立場に立った施策の実施ではなく、なによりも事業ありきの開発優先の姿だといわねばなりません。

私たちはかねてより余野川ダムは治水・利水とも必要はなく、総合治水対策で十分対応できることを主張してきました。ここにその具体案を明らかに致します。

一、明らかにした余野川ダム事業と

猪名川治水の問題点

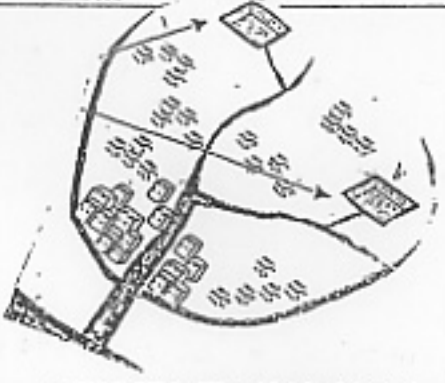
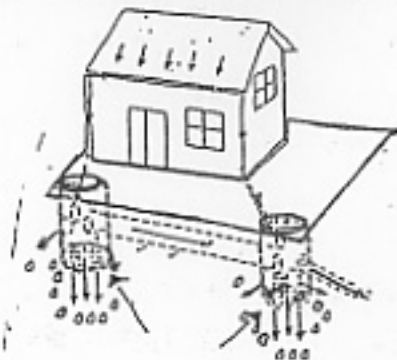
①余野川ダムは必要か

近畿整備局の説明によれば、同じ猪名川総合開発事業流域内にある一庫ダム（兵庫県川西市）から利水の一部を余野川ダムに移すことを検討する、としています。これで一庫ダムは下流の阪神水域の水需要に備えて水量を高めに維持する必要はなく、川西市などの治水対策に寄与する、というのです。

しかし、現在阪神水道では水が余っており、府営水道実績は需要予測を四三万㎡も下回り、工業用水の転用も考えられ、節水型の二十一世紀にこれ以上の水利（水資源）の確保は必要ありません。また、ダム建設費と水利権代により、水道代金の値上げが予想されますが、そのツケは市民の肩に負わされることとなります。

環境の点から考えてみても余野川ダム建設計画地は豊かな自然と里山がたつらなり、我が国のレッドデータブック・レッドリスト（絶滅のおそれのある野生生物）や大阪府の保護上重要な野生生物（レッドデータブックに指定されている注目すべき種

猪名川流域の地域（総合）治水には
『特定都市河川浸水被害対策法』の適用を！
 全会派一致の2003年6月11日公布の新しい法律です

流域における雨水浸透施設の整備	河川と下水道の連携	宅地内の雨水ますに、貯留浸透機能を付加し、雨水の流出抑制を低減
		
*不合理な深い地下型よりも、地表流型の施設とする		

の各自治体（大阪府、豊中市、池田市、箕面市、豊能町、能勢町、兵庫県、尼崎市、伊丹市、川西市、宝塚市、猪名川町）に一致して直ちに政府に要求する事が必要です。

緑と環境政策と資料(創刊号)ご購入ください

緑と環境をまもる— の発行する「緑と環境」政策と資料(創刊号)をぜひお読みいただき、環境やまちづくりを共に語る広場として、みなさんの幅広いご意見をお寄せください。一部200円で販売しています。
 よろしくお願いたします。

緑と環境 政策と資料
 創刊号



発行所
 「緑と環境」編集委員会
 〒590-0001 大阪府河内郡茨木市大津
 茨木市立図書館
 1階
 電話 06-8532-1111
 代表者 藤田 隆雄
 編集長 藤田 隆雄
 発行所 茨木市立図書館
 〒590-0001 大阪府河内郡茨木市大津
 1階
 電話 06-8532-1111

緑と環境 まちづくりブックレット①

発行日 2003年8月5日

発行 緑と環境をまもる—
 住所

頒価100円